

蒸気機関車に乗って昔を懐かしむ

大森 栄

何十年かぶりにSLに乗った。家族サービスで長野駅から黒姫駅までの約1時間の旅であった。子供たちはそれだけでなく車での移動が多く電車のたぐいに乗ることだけで興奮気味であったが、さてSLに乗ったことがどのような形で記憶に残るのであろうか。

私のSLにまつわる最初の記憶は、小学2年生だったと思うが、曾祖母のお葬式に行く途中の列車である。煙となぜか網棚の網の緑色が浮かんでくる。途中の駅で初めて食べた駅そばも珍しかった。それ以来(?)駅そばには惹かれるものがある。10歳にも満たない子供の頃の記憶がSLに乗って蘇ってきた。その当時はまだ東京オリンピックの前であり、もちろんわが家にはテレビもなく、学校から帰ると家の周りの山や田畑を舞台に夕陽が山の端に落ちるまで、自然を相手に思いきり遊んだものである。学校に通うにしても、家から学校まで片道約1時間半、よく通えたと思う。今では歩いて15分の距離を車で移動する私からは想像もできない。SLの煙の臭いがその当時のことをさらにいろいろと思い出させてくれた。

薬を扱うことを生業としている今、その当時の薬に関する事柄について筆に任せて記してみたい。その当時は“良薬口に苦し”ではないけれど、薬は気軽に飲んでみようと思えるものではけしてなかった。それも道理で、その当時の飲み薬はまず粉薬が多かった。それは、製剤技術が未熟であり良質の錠剤やその他の剤形の製剤ができにくかったことにもよる。粉薬は苦味を軽減する工夫がしにくく、せめて甘味成分を賦形する(加える)くらいであった。注射薬となると、侵襲的な行為である。往診してもらおうか親に担ぎ込まれて医院に運ばれるという、それだけでなく圧倒的に恐ろしい過程の果てに行われる行為である(これは現在でも同じか)。当時の注射といえば、注射針は煮沸消毒を行って繰り返し使うせいか先端があまり鋭くないので刺すときに先ず痛い。何かといえばお尻にブスッである。かくして、薬というものには近づきたくない印象を植え付けられる。翻って現在、薬に“お”がつきお薬となり、苦味のあるものはコーティングされ、カプセル、錠剤も良質のものが多い。水なしでも飲めるOD錠は老人にも便利、服用時に溶かして用いるドライシロップはほとんどおいしいそうな味がついている。経口栄養剤にはバニラ味など、まるで子供の練りハミガキではないか。かくして薬は、おいしく(?)投与(服用)しやすいものに変身したのである。当然いやいや飲むものではなくなり、患者は薬を欲しがり、医師はそれに応じて患者に処方することとなった。当院でもこうして薬剤費がかさみ(それだけが原因ではないが)、薬剤部長は苦しい立場に立たされることとなっているのである。40年前の薬は最小限使うものと考えられており、患者もできるならばお世話にならないと思っていた人が多かった様な気がする。私は苦い粉薬と含嗽剤がいやで

仕方がなかった。一方、昔なつかしい薬に消毒液の赤チンキがある。膝をすりむいたりすると必ずといっていいほどわが家の救急箱から赤チンキが出てきて膝小僧を真っ赤に変えた。何度も塗ると乾いた個所がてかてか光っていた。その光り具合が、何となくすりむいた傷を治してるんだぞといわんばかりに思えたものである。その赤チンキはいつの間にか救急箱から姿を消してしまった。赤チンキには、水銀の入ったマーキュロクロムが使われていた。この水銀化合物自体には毒性がないが、製造者の健康を考慮して製造が中止されてしまったのである。いたずら坊主の勲章みたいでもあったあの赤チンキのてかてかも今では懐かしい。今はポピドンヨードが使われているが、光らない。

この時代に世界を震撼させた薬害が起きた。その大事件とは、サリドマイド被害である。サリドマイドは1957年に当時の西ドイツで催眠薬として「コンテルガン」の名前で売り出された。しかしFDAは資料不備として1960年申請を退けている。この担当者はアメリカをサリドマイド窩から救ったともいえる。そして、日本では、1958年に癖にならない催眠剤として「イソミン」の名前で登場した。翌年には胃腸薬の中にも配合された薬剤も販売されている。世界に先駆けて販売を開始した西ドイツでは、妊娠初期の妊婦がサリドマイドを服用した場合に、上腕あるいは前腕が完全欠損あるいは部分欠損し、手指はほぼ正常な形で存在し直接肩に付着するフォコメリア（phocomelia）という奇形が数多く報告され、1961年にはサリドマイドが回収され市場から消滅した。一方の日本ではそれ以降も世界の大勢を無視し、1962年2月に「パングル」という名称の新たなサリドマイド製剤を認可すらしている。ようやくサリドマイドの販売が停止されたのは1962年9月であった。この様な経過で、世界中で4,000人弱のフォコメリア被害者が生まれた。日本は西ドイツの3,000人強について二番目に多い309人の被害者を出した。

そして40数年を経て、再びサリドマイドが医療の場に戻ってくることになる。昨年10月に多発性骨髄腫に適応を有する薬として、厚生労働省から製造承認が下りた。この件について厚生労働省の意見書が出されてパブリックコメントを求められて数カ月も経っていない。先のサリドマイド被害が起きた時も西ドイツで認可されてから1年余で日本で認可されている。今回の一連の流れも安易に市場に復帰させた感も否めない。現代の医療従事者は果たしてこのサリドマイドをうまく使いこなせるだろうか。本年初頭には市場にお目見えするが、この40数年の間に我々が薬の適正な使用という観点から見てどのくらい成熟したかが問われることでもあろう。

SLの1時間の旅が、この40年あまりの前と現在を囚らずも見比べるようなチャンスを与えてくれた。黒姫駅に降り立ち、甘酒をご馳走になり、小林一茶のお墓をお参りした。そこには更なる歴史があった。雨模様が風情が感じられた風景ではあったが、残念ながら町並みが少し寂しかった。

(信州大学医学部附属病院薬剤部教授)